

夜ノ森の桜・・・咲いたろうか

平成24年4月15日

原町中央産婦人科医院

院長 高橋亨平

富岡町夜ノ森のさくら・・・いつもの年と同じように今年も咲いたろうか。あの美しい桜の花のトンネル、私の自慢のスポットであった。今はもう見る事は出来ない。昭和13年12月15日、当時の台湾、台湾省、台中県、南投街、芳美小学校の教員官舎で、私は生まれた。幼少の頃は、台湾の人たちにとても親切にされ、楽しく幸せな日々を過ごした、いい思い出だらけであった。6歳のとき、日本は敗戦した。学校では、中国の国歌が教えられ、半年とたたないうちに又、別な国歌に変わり、歌わされた。翌年アメリカの貨物船で、引き上げが決まった。その間、様々な苦労はあったが、ともかく父の実家のある、現在の福島県双葉郡富岡町夜ノ森にたどり着いた。月明かりに、桜が満開でとても美しかったが、自分には寒さだけが強く記憶に残った。桜通りの、真ん中で、富岡第二小学校、富岡第二中学校、いわき高校へと進んだ。

入学したといえば、桜通りに行き、卒業したといったら桜の下で写真を撮り、咲いていても、いなくても、いつも、夜の森の桜と共にあった。

そして又、この季節になるといつも母の言葉を思い出す。今日出来る事は明日までのばすな！！と言うのが信念にあって、遣り残した事が見つかり、明日は絶対にやるからと言いつても、「明日ありと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものかは」と言って、いつも切り返されていた。子供心に、だいたいの意味は分かっていたが、軽く覚えていただけであった。今はこの季節になると毎年思い出し、年々重さが増してくるのを強く感じる。毎日が当たり前のように来て、当たり前に過ごしてきた日々、突然の東日本大震災・続いて起きた原発事故、数多くの人たちに明日は無かった。そしてそれが、無情にも夜半の嵐となったのである。生き延びた人達にも、生活の生業や全てを失うという、辛い環境が待っていた。生きていくためには、何を何時、どういう風にしなければならぬのか、考えなければならぬ。そして、急がなければ又、明日は無いのである。

所詮は、人生は短い。「散る桜、残る桜も、散る桜」無常である。空しい言葉ではあるが、事実である。だから、残された時間を大切に、復興を急がなければならぬ。セシウム半減期は30年、人類が解決できる範囲にある。

しかし、プルトニウムの半減期は2万1千年、近代人類の歴史期間に近い。100年や200年の期間を論じ、先送りしている人類、神の領域を犯してしまったとしか言いようが無い。それに比べるとセシウムの半減期は、可愛らしい、たった30年であり、しかも、自分の居場所を絶えず教えている。しかも、低線量被曝ではデータからも、実験からも何らの影響も報告はされていない。こんなものを怖がっている暇は無いのである。みんな、前に進もう！！少しでも！！細かい事はそれから論じても充分間に合うのだから。

ただ、急がなければ、子供が、妊婦が安心して生活できる環境を、早く確立し、アピールなければ、風評だけでも、廃村、廃県にもなる事は、いやと言うほど知らされたはずではないのか。

妊婦、子供、若者のいない町は、人口の自然減が激しく、滅び行く兆しと重く受け止めなければならない。広くは日本の将来と同じだ。

国敗れて山河あり、城春にして草木深し。昨年この時期、何も考える余裕は無かった。桜が咲いても無視していた。・・・今年はきっと美しいと思うだろうか。・・・明日ありと、思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものは。・・・みんな、分かってくれ・・・たのむよ。